



アインシュタインの手紙

はじめに

アインシュタインから娘リーゼルに宛てられたと言われる秘められた手紙があるところを私が知ったのは今月の22日、孫娘から教えられました。

調べて見ましたら、その内容は2015年7月にユニティインスティテュートさんのWEBに掲載されていました。既に多くの方がご存知のことかも知れませんが、リーゼルさんに焦点を合わせて偉大なる、アルベルト・アインシュタインをウキペディアから編集要約しました。

アルベルト・アインシュタイン

(1879年3月14日 - 1955年4月18日) ドイツ生まれ。

「20世紀最高の物理学者」や「現代物理学の父」等と評され、1921年のノーベル物理学賞を受賞。

幼少期は父の職業の都合でドイツ国内を転々とし、イタリア・ミラノにも移住したことがあります。

1896年チューリッヒ連邦工科大学校入学

1901年、スイス国籍を取得。このころ恋人ミレーバ・マリッチはアルベルトの子を身ごもり、1902年初頭にその子（娘）を産んだ。その子は「Lieserl」と呼ばれていたが、出産後にミレーバは子供をとまわずスイスへと戻ってきた。リーゼルは生まれてすぐに養女に出してしまったとされ、早世したのかその後の消息も不明となっている。

(2018/10/23現在訂正されていません)

1903年1月6日、正式に結婚し、翌1904年には長男ハンスを授かる。

1913年、ベルリンに移住、数ヵ月後に、アルベルトが再従姉のエルザに対して恋愛感情を抱いている、ということが妻のミレーバに知られ、その発覚数ヶ月後に妻ミレーバは長男・次男とともにチューリッヒへと引っ越す事態となり、5年間の別居状態の後1919年2月に正式に離婚の手続きが完了。アルベルトは当時、ミレーバに対してそれなりの額を払うような金銭的な余裕はなかったので、「ノーベル賞を取ってその賞金をミレーバに譲る」と約束する、離婚が成立した数ヵ月後の1919年の6月、アルベルトはエルザと再婚した。そして離婚成立の2年後にノーベル賞受賞の決定が通知された。元妻との離婚の一連の騒動が完全に片づけられた。(アインシュタインがノーベル賞の賞金を何に使ったかというクイズ番組が今年ありました)

戦争と平和に揺れる

1914年、第一次世界大戦が勃発する。この頃、知識人に向けて『ヨーロッパ人への宣言』で平和行動について書いた。

1915年、ロマン・ロランと出会う。意気投合した二人は、命がけで平和運動をしている人々を手助けする方法について話し合ったという。

第一次世界大戦中は平和主義を掲げ、戦争を公然と批判した。「2%の人間が兵役拒否すれば、政府は戦争を継続できない。なぜか、政府は兵役対象者の2%の人数を収容する刑務所を保有していないんだ」と発言し、反戦運動に影響を与えた。

しかし、第二次世界大戦の際は、一転して戦争を正当化し、「最早、兵役拒否は許されない」と発言し、同時代人の文学者ロマン・ロランから後に痛烈に批判された。また、ユダヤ人である彼は、ユダヤ人国家建設運動であるシオニズムを支援した。このためナチス・ドイツから迫害を受け、アメリカに亡命した。

1922年10月には日本への訪問を目的に夫婦で客船「北野丸」に乗船。11月17日に訪日したアインシュタインは、その後43日間滞在し、親日家となる。

1939年、当時のアメリカ合衆国大統領であったフランクリン・ルーズベルト宛ての、原子力とその軍事利用の可能性に触れた手紙に署名、アインシュタインはマンハッタン計画に関しては一切関与していない。しかしながら、レオ・シラードの勧めにより当時のアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルト宛への手紙に署名したことは事実であり、その手紙の内容は「確信は持てませんが、非常に強大な新型の爆弾が作られることが、十分に考えられます。この爆弾一つだけでも、船で運んで爆発させれば、港全体ばかりかその周辺部も壊すことができるほどの威力を持っています」という内容だった。その結果、ルーズベルトによりウラン諮問委員会が作られ、アインシュタインの提言が検討されることになり、黒鉛・天然ウラン原子炉の研究についての資金援助が決定した。ただし、「原子爆弾については、はっきりしないことが多すぎた」ため、原爆開発は見送られた。

しかし、2年後の1941年秋にはアメリカで原子爆弾の開発・製造が開始した（マンハッタン計画）。これは41年夏以降、イギリスの科学者たちによる「原爆製造は可能である」とする検討結果がアメリカに伝わるようになったためとされる。このとき、アインシュタイン自身はマンハッタン計画への協力を求められることはなかった。国防研究委員会の議長であったヴァネヴァー・ブッシュはその理由について、アインシュタインの過去の平和主義やシオニズムの政治的傾向からみて彼は機密を守れない可能性があった、とした。

1945年、広島市への原子爆弾投下報道に衝撃を受ける。9月2日に第二次世界大戦終結。連合国の一員であるアメリカは戦勝国となったが、アインシュタインは「我々は戦いには勝利したが、平和まで勝ち取ったわけではない」と演説する。

日本に原爆が落とされたとの一報を受けたとき、「O weh! (ああ、なんというこだ!)」と漏らしたと伝えられている。

死去する前年の1954年に、「もしヒロシマとナガサキの事を予見していたなら、1905年に発見した公式は破棄していただろう」と語った。

アメリカに滞在中の湯川秀樹のもとを訪ね、「原爆で何の罪もない日本人を傷つけてしまった。こんな私を許してください」と激しく泣き出し、深々とお辞儀を繰り返したという逸話があるほどである。なお、この姿を見た湯川は、「学者は研究室の中が世界の全てになりがちだが、世界の平和なくして学問はない」という考えに至り、世界平和のための運動に力を入れるようになったという。

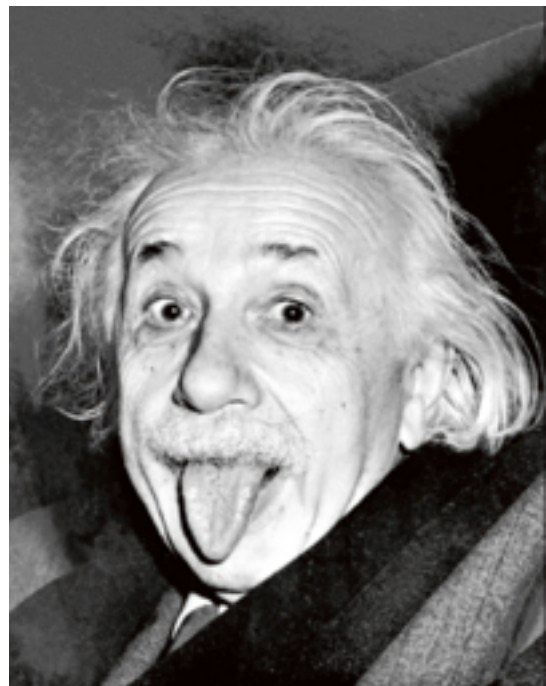
1955年4月11日、哲学者バートランド・ラッセルとともに核兵器の廃絶や戦争の根絶、科学技術の平和利用などを世界各国に訴える内容のラッセル＝アインシュタイン宣言に署名する。4月13日、建国7周年を迎えるイスラエルと同国国民へ寄せるラジオ放送に関する打ち合わせ後、心臓付近の痛みに倒れる（腹部動脈瘤の肥大）。

4月15日にプリンストン病院に入院し、周囲から手術を勧められるもこれを拒否。入院中、駆けつけた長男ハンスと面会した他、病院でも研究を続けるべく秘書に電話を掛け、必要な用具を持って来るよう伝えてもいる。そして4月18日の午前1時過ぎ、アインシュタインは76歳の生涯を終える。彼は死の間際にドイツ語で最後の言葉を遺したが、その場にいた看護師がドイツ語を理解できなかったため、彼が最後に何を言っていたのか、その内容については不明。

アインシュタインの死後、同年7月9日には彼が生前に署名したラッセル＝アインシュタイン宣言が発表された。アインシュタインが人類に放った遺言状ともいえる。この宣言には、日本人の湯川秀樹も署名している。

写真について

人前ではめったに笑顔を見せたことがなかったと言われている。自身が舌を出している最も有名な写真は、1951年3月14日、アインシュタインが72歳の誕生日に、INS通信社カメラマンだったアーサー・サスの「笑ってください」というリクエストに危うく応えそうになってしまい、とっさにそれを隠そうとした表情を撮ったものである。しかし、その写真は、アインシュタイン本人もお気に入り、9枚焼き増しを頼んだほどである。この写真は、1951年度のニューヨーク新聞写真家賞のグランプリを受賞した。また、切手にもなった。（以上ウキペディアより要約編集しました）



アルベルト・アインシュタインから娘への手紙：

1980年代の末、アインシュタインの娘リーゼは、父から彼女に宛てられた1400通の手紙を、父親の死後20年間は内容を公開しないという指示を添えて、ヘブライ大学に寄付しました。

これはリーゼ・アインシュタイン宛ての手紙の中の1通です。

「私が相対性理論を提案したとき、ごく少数の者しか私を理解しなかったが、私が人類に伝えるために今明かそうとしているものも、世界中の誤解と偏見にぶつかるだろう。

必要に応じて何年でも何十年でも、私が下に説明することを社会が受け容れられるほど進歩するまで、お前にこの手紙を守ってもらいたい。

現段階では、科学がその正式な説明を発見していない、ある極めて強力な力がある。それは他のすべてを含みかつ支配する力であり、宇宙で作用しているどんな現象の背後にも存在し、しかも私たちによってまだ特定されていない。この宇宙的な力は愛だ。

科学者が宇宙の統一理論を予期したとき、彼らはこの最も強力な見知らぬ力を忘れた。愛は光だ。

それは愛を与えかつ受け取る者を啓発する。

愛は引力だ。

なぜならある人々が別の人々に惹きつけられるようにするからだ。

愛は力だ。

なぜならそれは私たちが持つ最善のものを増殖させ、人類が盲目の身勝手さのなかで絶滅するのを許さないからだ。

愛は展開し、開示する。

愛のために私たちは生き、また死ぬ。

愛は神であり、神は愛だ。

この力はあらゆるものを説明し、生命に意味を与える。

これこそが私たちがあまりにも長く無視してきた変数だ。

それは恐らく、愛こそが人間が意志で駆動することを学んでいない宇宙の中の唯一のエネルギーであるため、私たちが愛を恐れているからだろう。

愛に視認性を与えるため、私は自分の最も有名な方程式で単純な代用品を作った。

「 $E = mc^2$ 」の代わりに、私たちは次のことを承認する。

世界を癒すエネルギーは、光速の2乗で増殖する愛によって獲得することができ、愛には限界がないため、愛こそが存在する最大の力であるという結論に至った、と。

私たちを裏切る結果に終わった宇宙の他の諸力の利用と制御に人類が失敗した今、私たちが他の種類のエネルギーで自分たちを養うのは急を要する。

もし私たちが自分たちの種の存続を望むなら、もし私たちが生命の意味を発見するつもりなら、もし私たちがこの世界とそこに居住するすべての知覚存在を救いたいのなら、愛こそが唯一のその答えだ。

恐らく私たちにはまだ、この惑星を荒廃させる憎しみと身勝手さと貪欲を完全に破壊できる強力な装置、愛の爆弾を作る準備はできていない。

しかし、それぞれの個人は自分のなかに小さな、しかし強力な愛の発電機をもっており、そのエネルギーは解放されるのを待っている。

私たちがこの宇宙的エネルギーを与えかつ受け取れることを学ぶとき、愛しいリーゼル、私たちは愛がすべてに打ち勝ち、愛には何もかもすべてを超越する能力があることを確信しているだろう。なぜなら愛こそが生命の神髄（クイントエッセンス）だからだ。

私は自分のハートの中にあるものを表現できなかったことを深く悔やんでおり、それが私の全人生を静かに打ちのめしてきた。

恐らく謝罪するには遅すぎるが、時間は相対的なものだから、私がお前を愛しており、お前のお陰で私が究極の答えに到達したことを、お前に告げる必要があるのだ」。

お前の父親

アルベルト・アインシュタイン

以上はユニティインスティテュートさんのWEBより転載です

あとがき

この手紙の真偽を検証する力には私にはありませんが、世間では早逝したかと言われていた長女リーゼルさんに1400通の手紙を出したアインシュタインの心情、手紙の末尾の謝罪文は本人しか書けない罪の意識であると思います。「愛は神であり、神は愛だ」という表現は、新約聖書にあります。

「わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます」

（ヨハネ第一の手紙 4章16節）

アインシュタインは5歳から3年間、ミュンヘンにあるカトリック系の公立学校へ通ったそうです。その頃暗誦された言葉が心に残っていたのではないのでしょうか。

伝記には書かれないことがあります。研究が進み真実が明らかになることもあります、時の判断で追記されない場合もあります。伝記の数は多いほど、人間の複雑性と個性の豊かさ、本人と書く人の対話の仕方が分かり、後世に学ぶ人へ伝える価値が増えると考えます。昨年ベストピア第365号から369号まで「アッシジの聖フランシス」を書きましたが、11冊の伝記から学びました。まだまだ研究が続いているようです。